

巻 頭 言

2008 年、本学の海外キャンパス昭和ボストン（Showa Boston Institute for Language and Culture）は創立 20 周年を迎えた。これを記念し、本号には Provost 学長の 20 周年記念式でのスピーチを掲げ、ボストン教員から寄稿された論文やエッセイも収録した。

周知のごとく、米国のボストンは学問、研究センターの街である。保守と革新の両方をうまく調和させている魅力的な場所である。

私が初めてボストンを訪れたのは 1979 年の春。当時はミシガンで学生生活をしていて、ボストンに在住していた友人の招きで出かけていった。せっかくボストンを訪問するのであるから、大胆にも二人の重要人物に会おうと計画をたてた。

一人が Noam Chomsky 氏で、もう一人は元駐日大使、Edwin Reischauer 氏である。当時、Chomsky 氏のもとで学位論文を書いていた先輩が、いつでも会えると言うので、約束もとらずに、気軽に付いていくと、イタリアに行ったとかで、千載一遇の機会を逃がしてしまった。

私が卒業した日本の大学の学科ではその当時は Chomsky の生成文法が最先端で、選択の余地なく思い切り叩きこまれた。しかも、その授業の担当教授は伝統的に制限なし一本勝負という夜まで続く授業を行い、いつ終わるかわからない授業であった。私はついに学生控室の七夕に、「Chomsky, Chomsky と夜も眠れず」と短冊をつるし、先輩から叱られたことを覚えている。Chomsky 氏に会ったら、恨み言のひとつでも言おうと思っていたのだが、実に残念であった。

もう一人は故駐日大使 Edwin Reischauer 氏である。当時はハーバード大学の日本研究所所長をしておられた。Reischauer 氏の元秘書であったアメリカ人女性と親しかったので、その方の紹介で、会うことができた。Reischauer 氏は多忙にもかかわらず、長時間、「おしゃべり」の相手をしてくれた。常に優しい微笑みをたたえてはいたが、眼光はするどく、全てを見透かされているような気持ちが今でも甦ってくる。共通の友人の話、日米学生会議の話など話題は多岐に及んだが、急に日本人留学生の英語力の話になった。当時のハーバード大学で学んでいる日本人留学生の英語力を“the bottom of the world”と、Reischauer 氏は言い切った。「そこまで言わなくても…」と思ったが、何も反論はできなかった。日本人は読んだり書いたりできるが聞いたり、話したりするのは苦手だと言うが、とんでもない。読めないし、書けない。つまり、どれも十分でないと言ったのだ。何か自分が叱られているような気分になり、思わず下を向いてしまった。親日派ゆえの叱咤激励であったと思うが、そのときの“the bottom”という言葉は今だに耳について離れない。

私とボストンの関係はこうして始まった。その 10 年後、昭和ボストンの立ち上げに行く運命が待っていたようとは夢にも思っていなかった。実は昭和ボストンを開くときに Reischauer 氏を顧問に迎えようかという話が出たのであるが、ご本人の体調が万全でなかったことなどもあり、立ち消えになってしまった。

ボストンには世界の頭脳が集まっているが、研究だけに没頭しているのではなく、その研究をスピーディーに現実社会に応用していくエネルギーには圧倒される。

この街に、本学が拠点を持っていることは幸運であり、学生だけでなく、むしろ教員に利用してほしいと思っている。気がつけば、最後は「売り込み」になってしまった。

もし将来余裕ができればこの街で、何の縛りもなく自由に、多くの友人と延々と語り明かし、心地よい頭の疲れを味わう日々を送ってみたい。本当にそういう日が来るのか、神のみぞ知るである。（史）